タイトル

瓦礫の下の友情

作 津島次温 (つしまつぐはる)

人物表

ジヨデイ (25歳) 在日米国人

敏子 (28歳) ジヨデイの友達

芳江 (65歳)

ジヨデイM

モノローグのジヨデイは六十代

○紹介文

太平洋戦争開戦当時、日本国内にはアメリカ人やイギリス人などの「敵性外国人」が2100人あまり在住していた。これら外国人の男性の多くは抑留所に拘束され、その家族は警察に監視される生活を強いられた。ジョディは横浜生まれ横浜育ちのアメリカ人。敵性外国人として警察に監視されながら生活する日々を送っている。

1945年5月29日、横浜は大規模な空襲に見舞われる。ジョディは友人の敏子と共に煙と炎が渦巻く町の中を逃げ惑う。そして二人は、焼け落ちていく建物へヨロヨロと歩み寄る老婆に出会う。

在日アメリカ人女性の空襲体験を通して「敵」とは何かを考える物語。

ジョディM「私の名前はジョディ・シン普森。大正7年、横浜で生まれました。父はアメリカ人。母は日本人。生まれたときの国籍はアメリカです。横浜のインターナショナルスクールを卒業して、戦争が始まるまでは父の仕事の手伝いをしていました。私は父の血を受け継いで髪は金色、目はブルー。でも、自分は日本人だと思って育ってきました。日本人の友達が沢山居ましたし、横浜の町も大好きでした。そんな私に、自分はアメリカ人なんだと釘を刺したのが戦争でした。1941年12月8日、日本とアメリカの戦争が始まりました。その日から私たち家族は敵国人になったのです。家に警官が押しかけてきて、父と弟は抑留所に連れて行かれました。私たちも生活を監視されるようになりました。やましいことは何もしていないのに、いつも後ろめたい気持ちに苛まれるようになった。ただ、友達や近所の人たちはそれまでと変わらず私や母に親切にしてくれました。だから私も母もあの戦争の時代をなんとか暮らしていった。それは今思えばとてもうれしいことでした。横浜は本当の良いところ。その横浜が火の海になったのです。1945年、終戦の

年の5月29日のことでした」

ジヨデイ「オオバコにヨモギ。シロツメクサ。あ、ドク
ダミもあった」

敏子「ジヨデイ、ジヨデイ、見て。タンポポがほら、こ
んなにたくさん」

ジヨデイ「ほんとだ」

敏子「近所の空き地も覗いてみるものね」

ジヨデイ「よかった。ひとまず二、三日分のおかずには
なりそうね」

敏子「ねえ、タンポポってどうやって食べるとおいしい
かなあ」

ジヨデイ「魚の骨を磨り潰して和えるのが良いって雑誌
に書いてあったけど」

敏子「魚の骨かあ」

ジヨデイ「できれば食べたくないよね、そういうの」

敏子「あ、でも、案外美味しいかもしれないよ。ほら、
猫ってさ、魚の骨カジカジするじゃない。あれ、きつ
とおいしいからでしょう」

ジヨデイ「敏子、ありがとう」

敏子「え、何、どうして」

ジョディ「私のことかばってくれて。農家でも。今もそうだし」

敏子「かばうも何も、私ほら、思い付いたことポンって言っちゃうから」

ジョディ「ホントにごめんね。私が居なかったら、きっと野菜を分けてもらえたのに」

敏子「あなたの所為じゃないよ」

ジョディ「でも、あの人たち驚いてたわ。私の金髪と青い目に」

敏子「だからあなたは悪くないの、ジョディ。目の色も髪の色も、国籍も関係無い」

ジョディ「わざわざ農家まで行って、何ももらえずに帰って来るなんて」

敏子「あの人たちが欲張りなだけよ。みんな食べるものに困ってるって分かっているはずなのに、お金お金って」

ジョディ「でも」

敏子「あなたは横浜で生まれて横浜で育った私の友達。

そうでしょ」

ジョディ「ありがとう、敏子」

敏子「ねえ、せっかくだから野蒜も探そう」

ジョディ「そうね。あれ、結構おいしいのよね」

ジョディM「そのときでした」

ジョディ「ねえ敏子、あの音」

S E B29の爆音

ジョディM「遠くからブーンと唸るような低い音が聞こえてきました」

ジョディ「空襲だわ」

敏子「また東京かしら」

ジョディ「気の毒に」

ジョディM「そのころ、東京の周辺は何度も空襲を受けていました。けれども私の知る限り横浜は一度も爆撃されたことが無く、私たちは空襲を自分のこととは感じていませんでした。横浜は外国人が多く住む街だからアメリカも遠慮しているのだろうと、楽観的に考え

ていたのです。ところが、その日はいつもと違いました」

敏子「ねえ、飛行機の音、近づいている気がしない」

ジョディM「普段なら東京の方へ遠ざかっていくその音が、少しずつ大きくなっていくのが分かりました」

敏子「こっちへ向かってきてる」

ジョディ「あ、敏子、あれ、見て」

ジョディM「南の空におびただしい数の機影が見えました」

ジョディ「B29」

敏子「嘘、横浜を狙ってるの」

ジョディM「あっという間の出来事でした。遠くに見えたB29の編隊は私たちの真上までやってきました。

そして、木が騒ぎ、家の屋根や柱がガタガタと音を立

て、町全体が震えているようでした。横浜の空はB2
9の黒い大きな翼で埋め尽くされたのです」

ジヨデイ「敏子、逃げよう」

敏子「ええ。でも、どこへ……あ」

ジヨデイ「敏子、どうしたの」

敏子「ジヨデイ、あれを見て。B29から」

ジヨデイ「え」

ジヨデイM「B29の機体から黒い物体が次々とこぼれ
落ちてきました。その物体は上空で破裂して、何十本
もの細長い光の筋に姿を変えました。そして、その光
の筋があちこちの家の屋根にブスツ、ブスツという音
を立てて突き刺さりました」

ジヨデイ「あれは」

ジヨデイM「光の筋に突き破られた家から炎と煙が湧き
あがりました」

ジヨデイ「焼夷弾」

ジヨデイM「それが大空襲の始まりでした」

SE 空襲。燃える町。

敏子「きゃあああ」

ジヨデイ「町が燃えてる」

ジヨデイM「あたりの空に一瞬のうちに煙が広がりました。B29の爆音が轟き、煙の上から降り注ぐ焼夷弾は横浜の街に次々と火を放ちました」

敏子「なんてことなの」

キャシー「ここに居たら火に飲まれる。防空壕に避難しましょう」

敏子「ええ」

ジヨデイM「私たちは防空壕を探して走りました。赤黒い炎が町を覆い、空には灰色の煙が渦を巻いていまし

た」

ジヨデイ「火がどんどん広がってる」

敏子「ジヨデイ、そっちはダメ。あっちへ行こう」

ジヨデイ「待って。敏子、あそこ、誰か居る」

ジヨデイM「火の手を上げる建物の側に、お婆さんがひとり立っていました。お婆さんは炎に引き寄せられるように、焼け落ちていく家の方へヨロヨロと近寄っていました」

敏子「危ない！」

ジヨデイ「お婆さん、ダメ！」

ジヨデイM「私たちはお婆さんの元へ駆け寄りました」

ジヨデイ「お婆さん、止まって。そっちは危ない」

芳江「どいとくれ。私はこの家に戻るんだ」

ジヨデイ「ダメ。あんなに燃えてるのに」

芳江「分かってるよ」

ジヨデイ「これ以上近づいたら死んじやう」

芳江「だから行くんだよ。私はここで死ぬ」

ジヨデイ「馬鹿を言わないで」

芳江「放せ」

ジヨデイM「私はお婆さんの前に立って、その体を必死に押し返しました。けれどもお婆さんはどうしても家へ近づこうとするのです」

芳江「放せ」

ジヨデイ「ダメ」

芳江「いいから放せ、ああ！」

ジヨデイM「大きく見開かれたお婆さんの目の中で赤い

炎が躍ったように見えました」

芳江「ああああ！」

ジヨデイM「私の背後からメシメシという大きな音が聞こえてきました。振り返ると、燃え上がる家が傾こう

としていました。柱が燃え落ちて、支えを失ったその家は音をたてて崩れました。火の粉が舞い上がり、私たちの体に降り注ぎました」

芳江「ああ……」

ジヨデイM「私は倒れそうになったお婆さんの体を支えました。お婆さんの顔は炎で赤く揺らめいていました」

敏子「ジヨデイ、大丈夫」

ジヨデイ「うん」

芳江「ああ……久子さん……貴裕……」

ジヨデイ「お婆さん、ここは危ないわ。一緒に逃げましょう」

芳江「なんで私を止めた」

ジヨデイ「止めなきやお婆さんは死んでたわ」

芳江「だから死ぬつもりだったんだよ」

ジヨデイ「馬鹿なことを言わないで」

芳江「あんたのその髪、目の色。アメリカ人か」

ジヨデイ「私は……」

芳江「放せ！鬼め」

ジョディ「鬼……」

敏子「ジョディ、向こうに防空壕があったわ。早く逃げ

ましよう」

ジョディ「お婆さん、一緒に行きましょう」

芳江「嫌だ。私はここから動かないよ。ここで死ぬんだ

から」

ジョディ「死ぬなんて言わないで」

芳江「もう私に構うな」

敏子「ジョディ。火に飲まれる前に急いで」

ジョディ「お婆さん」

芳江「うるさい」

ジョディM「お婆さんは動こうとしませんでした。それ

で私は」

芳江「な、何をする」

ジョディM「私はお婆さんの背後に回ると脇に腕を回して体を持ち上げました」

芳江「放せ、放せ」

ジヨデイ「敏子、足！」

敏子「え」

ジヨデイ「お婆さんの足を持ち上げて」

敏子「分かった」

ジヨデイM「私が脇を抱え、敏子が足を持ち上げて、二人でお婆さんを運びました」

芳江「畜生！放せ！」

ジヨデイ「お婆さん、ジツとして」

芳江「誰が鬼なんぞに助けられるものか」

ジヨデイ「ジツとして！」

芳江「鬼、鬼！」

ジヨデイ「敏子、防空壕はどこ」

敏子「あっち」

芳江「放せー！」

ジヨデイM「私と敏子は、暴れるお婆さんを必死で運び、

なんとか三人で防空壕の中に逃れました」

ジヨデイM「それはとても小さな防空壕でした。防空壕と言っても、地面を掘って作った穴の上に鉄板のようなものを被せただけのもので、三人が身を縮めて何とか入れるような広さでした。中には誰もいませんでした。誰かの家の庭に掘られた、その家族の為だけのものだったのでしょうが、その家の人たちはもうどこかへ避難していたのだと思います。防空壕には扉も有りませんでした。敏子が近くに落ちていた板を持ってきて、入り口を塞ぎました」

敏子「ここで空襲が止むのを待ちましょう」

ジヨデイ「そうね」

ジヨデイM「入り口を塞いだ防空壕の中は真っ暗でした」

敏子「横浜がこんなことになるなんて」

ジヨデイ「ひどい」

芳江「ふん。爆弾を落としてるのはあんたの国の飛行機

だろ」

ジョディ「それは」

敏子「おばあさん、ジョディは横浜生まれで、ずっと横

浜で育ってきたの。この戦争とは何の関係も無いわ」

芳江「どこで生まれようが敵は敵だよ」

敏子「よくそんなことが言えるわね。ジョディが居なか

ったらお婆さんは死んでたのよ」

芳江「そうさせて欲しかったよ。私しやあ死にたかったんだ」

敏子「折角助けてあげたのに、なんなのよその言い方」

ジョディ「敏子、もうやめて。お婆さん、お願いだから

もう死ぬなんて言わないで」

芳江「ふん」

敏子「ジョディ、放っておきなさい」

SE 空襲

ジョディ「空襲、治まらない」

敏子「横浜が無くなってしまふ」

ジョディ「東京はこんな攻撃を受け続けてたのね」

敏子「私、今まで空襲を花火を見るように見てた。あの爆撃の火の下がどうなっているか、考えたことも無かった」

ジヨデイ「私も一緒よ」

敏子「こんなに酷いことになるなんて」

芳江「罰が当たったんだよ。私もあんたたちも」

ジヨデイ「罰？」

芳江「他人の苦しみに鈍感に生きてきたから、罰が当たったんだよ」

敏子「私たちは人を傷付けたことなんてない」

芳江「そんな人間居るものか」

敏子「なんなのよ。このお婆さん」

芳江「あんたたち、配給じゃあ食べていけないから農家に野菜をもらいに行ってるだろ」

敏子「ええ。行くわよ」

芳江「それだって鈍感な証拠さ」

敏子「なんで。お金を払って買ってるのよ。何が悪いのよ。むしろあの人たちの方が鈍感だわ。私たちがこんなに困ってるのに、少しでも高く売ろうとして」

芳江「薄情者に高く売りつけて何が悪い」

敏子「どっちが薄情者よ。困ってるときはお互い助け合
うべきでしょう」

芳江「あなたは農家の暮らしを知らないんだよ。一生懸
命野菜や米を作っても半分は地主に持っていかれる。
残りの半分は売って金にしなきゃ翌年の苗や肥料が買
えない。結局自分たちの手元には何にも残りやしない。
あんたら町の人間が美味しい銀シャリを食べていたと
きに、百姓はみんな、くず米やら、くず麦やら、ゴミ
みたいなものを食べて生きてきたんだよ」

敏子「そんなこと」
芳江「百姓の暮らしがどんなものかも知らないくせに、
自分たちが食うに困ったらこのうのと百姓に物乞いす
るんだね」

敏子「だって。野菜もらえないと、私たちだって」
芳江「知ったことか。結局あなたは自分のことしか考え
てないんだよ」

敏子「そんなんじゃない」
ジョディ「おばあさん、やめて」
芳江「ふん。横浜に住むアメリカ人か。あんたの家も金
持ちなんだろうね」

敏子「ジョディだって大変なのよ。お父さんとお兄さん

はアメリカ人っていうだけで抑留所に連れて行かれて、

ジョディやお母さんだって特高に監視されてる」

芳江「当然じゃないか。アメリカ人は敵なんだから」

敏子「ジョディは何にもしていないのよ」

ジョディ「敏子、いいの」

敏子「ジョディ、こんな人に言わせっ放しにする必要な

いわ」

ジョディ「いいの。私は大丈夫」

芳江「大体、抑留なんていい身分じゃないか。三食もら

えて死ぬ心配も無いんだろ」

敏子「なんてこと言うの」

老婆「私の息子は戦地へ行ったよ」

敏子「…：戦地、へ」

芳江「なんだ。あんたの家族もかい。だったらあんたも

分かるだろ。アメリカ人は敵だ」

敏子「ジョディは違う！」

芳江「一緒だよ。そう思ってるんだろ」

敏子「私はそんなこと思ったことない」

芳江「嘘をつけ」

敏子「嘘じゃない」

ジョーディ「やめて！もうやめて！」

敏子、芳江、黙る。

ジョーディ「やめて。私は日本が好き。日本人が大好き。

信じて」

敏子「ジョーディ……。大丈夫。分かってるよ」

ジョーディ「ありがとう」

芳江「ふん」

SE 空襲

芳江「ゴホッ、ゴホッ」

ジョーディ「お婆さん、これ、お水、飲んで」

芳江「敵の情けは受けないよ」

敏子「まったく。ジョーディ、もう放つときだよ」

ジョーディ「煙で喉を傷めたらいけないから、飲んで」

芳江「分かったよ」